

がんになりにくい眼や耳

がん社会 を診る

中川 恵一

ます。角膜から眼球内に入った光は、レンズの働きをする水晶体で屈折し、硝子体（透明なゼリー状の物質）を通り、網膜に投影されます。このとき、網膜が感じた光の刺激は視神経を通して、脳の視覚野に伝わります。

硝子体は、年齢とともに一部が液化化すると、眼球のなかで揺れ動くようになります。硝子体が網膜と癒着した部分がこの揺れによって引っ張られて、網膜が破れるのが

「網膜裂孔」です。高齢者だけでなく、ボクサーなどが受ける激しい衝撃でも起こることがあります。

この裂け目から硝子体の水分が網膜の下に侵入すると網膜が剝がれていき、最悪の場合、失明につながります。

眼科医から放置はできないと言われ、その場で、レーザー治療を受けました。網膜にできた裂孔のまわりに、瞳孔からレーザーを照射する「光凝固治療」です。裂孔を取り囲むように、網膜とその下の組織を接着させ、網膜を剝がれにくくします。裂孔自体を治療するわけではなく、これ以上の剝離を防ぐ処置となります。

けたときより、強いショックを受けました。自分の健康に自信が持てなくなった感じがします。

眼の病気には、私が患った網膜剝離の他、失明の原因トップの緑内障や加齢とともに進む白内障など、さまざまな種類がありますが、がんは例外的です。国内では年間約100万人が新たにがんと診断されますが、眼と周囲のがんは360人程度にとどまりません。

がんが少ないのは、耳も同様です。認知症の原因にもなる難聴の他、めまい、耳鳴りに悩む人は数知れませんが、耳のがんは非常にまれです。

眼や耳にがんができてにくいのは、活発に分裂する細胞が少なく、遺伝子のコピーミスが起りにくいからです。

がんができていくかわりに、新陳代謝によって機能を維持することができない眼や耳は、大切に使うことが、長持ちさせる方法はありません。（東京大学特任教授）

6月初旬、定期的な眼科検診で、網膜剝離と宣告を受けました。しかも、両眼です。自宅近くの眼科には、半年的时间に受診することにしており、今回も症状などほとんどありませんでした。担当医は網膜をくまなく観察すると、「網膜に穴があいています」とあっさり言いました。まさに、青天のへきれきでした。

網膜は、眼の奥（眼底）に広がる薄い膜状の組織で、眼球をカメラに例えると、フィルムのような役割を担ってい

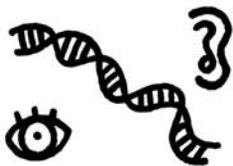


イラスト 中村 久美